



子ども樹木博士 ニュース

2025 - 6

No.99

子ども樹木博士認定活動推進協議会

巻頭言



私にとっての 「樹木の先生」の思い出



一般社団法人日本森林インストラクター協会 会長 寺嶋 嘉春

私にとっての「樹木の先生」は、と考えると、本当にたくさんの方々から教えられたことが思い出されるが、特に3人の「樹木の先生」の思い出が印象深い。

およそ50年前のこと、大学の夏休みに、はじめて植生調査のアルバイトを体験した。当時、目黒にあった国立林業試験場から声がかかり、複数の大学から7名の学生が参加。仕事の内容は、長野県と山梨県とにまたがる「金峰山国有林」の亜高山帯にある小屋に泊まり、毎日8時から17時まで、10日間休日無しの調査だった。全員で買い出しをして、プロパンガス運び上げ、沢からの水はあったが風呂無し、電気無し、日の出と同時に起床の10日間。

調査対象の国有林は、コメツガ・シラベ・オオシラビソの過熟天然林で、倒木が発生し稚樹の発生が見られる約90haについて帯状皆伐を行った場所。天然更新が林内・林外でどう行われるかが研究テーマ。この調査は100年続けると聞き、壮大な森の時間の流れを感じた。研究の提案者は、「前禎（まえてい）」こと、森林生態を学んだ人は誰でも知る前田禎三氏。後に、前禎先生をして曰く「豪放な人」、「大酒飲み」などとのうわさがあるが、

風貌物腰はともかく、一目お会いして、とてもまなざしの暖かい方であることが忘れられない。夕食後には、每晚、一升瓶を持ち出し、星明かりでの酒盛り、踊り出す学生もいた。朝食後は、小屋のまわりの植物の話。先生は、いつも重厚な牧野日本植物図鑑を片手で持ち歩き、それは、今にも分解しそうなほど使い込んだ図鑑だった。先生の著作には、学研1986発行『自然と友だちになる法① 森の樹木』がある。中古の本は今もネットで入手できる。

その数年後、私は、後に名誉森林インストラクターとされた、東京大学の文部技官の山中寅文氏に呼ばれ、小石川植物園の一角で、おでんの鍋を囲んでの樹木談義が行われる「山中教室」に毎月通った。山中寅文氏の編著としては、『グリーンセミナー』がある。

3人目の先生は、山中先生と同年代で、東京大学から東北大学に移られた西口親雄先生。先生の一般向けの著作は約30冊。先生にお願いし、平成元年から30年以上にわたり、鳴子町（現・大崎市）で「西口講座」を開催。森林インストラクターの貴重な体験と勉強の場となった。

すばらしい「樹木の先生」との出会いが、私の人生の宝となっている。

目次

巻頭言	私にとっての「樹木の先生」の思い出	(一社) 日本森林インストラクター協会 会長 寺嶋 嘉春…1
特集 I	ササの話(6) -ササは役に立つ-	植物生態研究家 新山 馨…2
特集 II	高尾山で出会う、ちょっと気になる植物(5)	森林インストラクター 宮入 芳雄…3
シリーズ I	樹木名の話(37) -トチノキは七葉樹-	森林植物研究家 埴田 宏…4
シリーズ II	観察会テンパリ日記(37)	森林インストラクター・樹木医 岩谷 美苗…5
シリーズ III	東南アジアの木々たち(64) -桃色と白の南国の花・天人花-	自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史…6
子ども樹木博士質問コーナー(79)		(一社) 日本森林インストラクター協会 会長 寺嶋 嘉春…7
事務局だより		8

特集 I



ササの話 (6)

—ササは役に立つ—



植物生態研究家 新山 馨

モウソウチクの旬は終わりましたが、山菜で有名な根曲り竹（チシマザサの別名）の収穫の時期になってきました。東北地方では熊を心配しながらも、多くの人が熱心にチシマザサのタケノコ、正しくはササノコ？取りに出かけます。特に山形県、秋田県や青森県などの積雪の多い山地帯はチシマザサの生育適地なので、趣味だけでなく山菜販売の実利も兼ねたタケノコ取りは、地域の大切な春の行事になっています。私（筆者）の兄は青森市在住ですが、春になると八甲田山系にタケノコ取りに入り、収穫したものを地元の瓶詰め工場や缶詰工場に持ち込んで、年中、タケノコが食せるように自家保存食としていました。

このようにチシマザサのタケノコが食用や売るほどに大量に取れるのは、ササの生態と密接に関係しています。ササは地下茎を伸ばし、節にある芽から毎年、新稈を出して栄養繁殖を何十年と続けます。ササは60年または120年に一度とも言われる一斉開花まで、花には全く投資せず、地下茎から新稈、すなわちタケノコを出し続けて、クローンを拡大し続ける植物です。地下茎は毎年、数十cmから1mほど伸長しますので、120年で数haまでササのクローンが拡大することになります。実際、いくつかのクローンが含まれるか不明ですが、十和田湖周辺のチシマザサが1979年頃に一斉開花した面積は約60haでした。チシマザサ以外にも、丹沢や奥多摩周辺で2000年以降にスズタケが大面積に開花した報告があります。

このスズタケは同じササの仲間でも食用には向きませんが、スズタケ細工の材料として貴重です。特に岩手県北部、一戸町鳥越地区の伝統工芸であるスズタケ細工が有名です。もちろんチシマザサの稈も長野県や青森県では、りんごを入れる手籠の材料として古くから利用されてきました。チシマザサは稈が太く丈夫なので農作業用のカゴなど丈夫な器具として利用され、稈が細いスズタケは買い物籠（写真1）や、おにぎり、サンドイッチを入れる弁当箱（写真2）、あるいは座布団状のクッションなどの材料として日常雑貨に利用されています。

このように日本人は、身近な山野に生えるササを種類ごとに上手に利用し、食用、農作業や日常生活の道具として利用してきました。広く見れば東南アジアから中国、日本にかけては、バンブー、タケ、ササをうまく利用する文化が共通であることがわかります。マ

レーシアではバンブーの太い稈に米を入れ、火にかけてココナッツライスを炊きますし、インドネシア、タイなどではバンブーで家を建てます。もちろん日本では、茶筌や竹垣、シャモジ、竹箸など、生活と文化に深くタケ・ササが関係しています。夏の素麺流しも竹なしには考えられません。皆さんも普段は意識しないササの有用性を想像して見てください。でも根曲り竹を取りに山に入る際は、くれぐれも熊にご注意ください。ちなみに冬を越して葉の縁が白くなったササを熊笹と呼んでいますが、これは「熊」ではなく歌舞伎役者の顔の隈取りの「隈」から来たと言われています。



写真1 鳥越地区のスズタケ細工の例：買い物籠



写真2 鳥越地区のスズタケ細工の例：弁当箱

特集Ⅱ

高尾山で出会う、
ちょっと気になる植物 (5)

森林インストラクター 宮入 芳雄

6月と言えばアジサイです。高尾山で見られるアジサイの仲間、タマアジサイ、ヤマアジサイ、コアジサイ、ガクウツギなどですが、ここでは私が高尾山で出会った珍しいアジサイを紹介したいと思います。

●「オクタマコアジサイ（奥多摩小紫陽花） 5～6月」

北高尾山稜の北面の山奥にグロテスクなケヤキの巨木があります。両手を上げ、腰をくねらしたベリーダンスを踊っているような樹形で、私は「異形のビーナス」と名付けました。最初に発見したのは冬だったので、緑を背景にしたビーナスを見たいと思い、春にまた訪れました。2009年5月19日。途中の道で森林保護員の相棒、加藤さんが不思議なアジサイを見つけました。花はコアジサイ、葉がガクウツギです。本人は「新発見だ!」と興奮していましたが、写真に撮り、様々な専門家に当たったところ、過去に奥多摩で発見された「オクタマコアジサイ」ということになりました。ガクウツギとコアジサイの自然交配（一部の文献でガクアジサイとの自然交配と書かれていますが、分布が違うので…）ですが、咲く時期が微妙に違うので、交配するのはかなり難しいと思われます。「オクタマコアジサイ」としては2例目の発見ですが、最初の株からは挿し木などで増やされて、園芸的には一般的な品種になっています。ただ、こちらはDNAが違うので…。



オクタマコアジサイ（奥多摩小紫陽花）

北高尾山稜の山奥で、まだ頑張って花を咲かせてくれ続けていることを願っています。

●「シロマイコ（白舞子） 6月～7月」

アジサイの花は種を作るために雄しべと雌しべを持つ両性花と虫たちを呼び寄せるための装飾花によって構成されています。一般の人が普段見ている園芸種のアジサイは装飾花が手毬状になっているものが多く、それがアジサイのイメージになっていると思います。ただ装飾花は種を作れないので、野生のアジサイは子孫を残さなければなりません。両性花を中心として、周辺に装飾花を配置するのが普通です。ところが異端児が現れます。ヤマアジサイなのにほとんどが装飾花で手毬状になる白い花のアジサイ（両性花も少しあります）。品種名として「シロマイコ（白舞子）」という名前が付いています。今ある園芸種は、こうした株を品種改良したものなのでしょうね。その花が咲いている場所は小下沢林道の鉄塔下土場から左に上る東作業道の間地点の崖の上です。知る人ぞ知る場所で、それなりに有名です。ただ2019年の台風19号により、作業道の入口が崩壊してしまいました。あれから5年半、きっと物好きの誰かが作業道に入るルートを開拓していると思います…。でも、無理して行く程のことは無いと思いますよ。



シロマイコ（白舞子）

シリーズI

樹木名の話 (37)

トチノキは七葉樹



森林植物研究家 埜田 宏

トチノキは冷温帯の谷間に生育する落葉高木ですが、市街地にも植えられています。明治時代にまとめられた『大日本有用樹木効用編（諸戸北郎、1903）』には、「この樹は、街路樹又は公園樹とする。深山の植物ではあるが、都会に植えてもよく成長し、害を受けることは少ない（意識）」と明記されています。



トチノキの花序、大部分の花はメシベが退化している雄花だが、ミツバチなどの昆虫には良い蜜源となる

トチノキの街路樹は東京の霞が関、栃木県庁前の大通りなどが有名です。市街地の土壌はミネラル分が多く、アルカリ寄りになる点が山地の斜面下部の崩積土に似ています。どうやら、都市の土壌が乾燥気味であることはあまり気にしないようです。

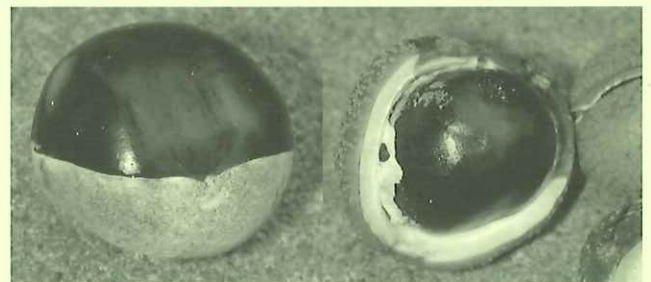
トチノキ属は世界に20数種ありますが、トチノキは日本だけに生育する「固有種」です。そのため、古代中国の植物名である漢名は存在しなかったはずですが、ところが、平安時代の辞書『新撰字鏡』には「橡」、『倭名類聚抄』には「杼」の漢名が使われ、和名は止知（とち）とされています。さらに、『類聚名義抄』では「枳、楸」が加わりました。しかし、中国では、これらの漢字は、ミズナラ属の樹種を表す名です。日本では、トチノキからデンプン質に富んだ大きな種子

が得られるということが重要でした。そのような樹木名を中国の古典から探した結果、大きなドングリを付ける樹木と混同されたのでしょう。明治時代になって、「七葉樹」、「天使栗」という正しい中国名が知られるようになりましたが、橡・枳・楸などの俗用漢字が、そのまま、使われ続けています。一方、日本から中国に渡ったトチノキは、優雅な樹形と都市土壤に耐えることから、「日本七葉樹」として、親しまれているようです。

では、和名のトチ、トチノキの由来は何でしょうか。残念ながら、わからないというほかありません。各地の方言名、古典での名など、すべて「トチ」であって、ぶれがなく、由来を探ることができません。



果実はちゃんとしたメシベのある下部の花だけに実り、熟すと3つに割れ、褐色で光沢のある種子が出てくる



大きなトチの実山村の救荒食として利用されてきた木灰であく抜きをした果肉にもち米を混ぜてついた「とち餅」は現在でも製造され、郷土食・土産物になっている

シリーズⅡ

観察会テンパリ日記 (37)



森林インストラクター・樹木医 岩谷 美苗

この前、樹木調査の仕事で、発注者が「ソメイヨシノってサクラなんですか？」って言っていて、とうとうそういう時代になったのかと驚きました。息子（20代）に確認してみたら「さすがにソメイヨシノは知ってて当たり前でしょう。」と言われ、その人だけかもしれない。しかし、今回は新たなフェーズに入ったような気がしました。昔は同業者に「こんな初歩的なことまで説明して、参加者をバカにしているんじゃないか？」と言われたものでしたが、もう「みんなが知ってる」と思ったら、大間違いかもしれません。大学の授業で、経済学部の子たちにカタバミで10円玉を磨かせたら、「草なんて、ほとんど触ったことないわー」と言われました。生活様式は変わり、価値観も変わり、みんながみんな緑と戯れて育ってはいないのです。だからといって「困ったものだ」とぼやいている場合はありません。「みんなは全く知らない白紙の状態」と思って、プログラムを考えたほうが良さそうです。

一方、すごく詳しい小学生が来たりします。ごくごく少数なんですが、興味ある子はどんどんレベルを高くするし、興味のない大人たちは「木ってやっぱり難しいですね」と諦めてしまう。もう「大人向け」「子ども向け」のくくりではないような気がします。特に子どもや若い人たちは、テレビを見ないので、偶然の出会いみたいなのが乏しくなっています。子どもに人気の共通の物は無く、自分の興味あるものだけ、調べたり動画を見て、どんどん興味は細分化しています。昔は「テレビなんて見たら、バカになる」って言われたのに、今は「地デジの時間ですよー。テレビを見ましょう」となっているのも皮肉です。今、緑に興味ない人たちは、本当に知らない時代に突入していると感じます。

少子化により、教科間で子どもの取り合いのようなところもあります。SNSで植物系は残念ながら人気は弱く、かといって子どもの取り合いというのなんか違うような気がします。子どもの頃から緑に親しめていたら、それは良いとは思いますが、ふれる機会が無い人もざらにいます。ふれてこなかった人たちへ、

緑と出会えるきっかけが用意できるといいなーと思う今日この頃です。

そういえば、ソメイヨシノが桜だと知らなかった人は、異動になったそうです。「こんなことも知らないの？」と責めるのではなく、「ソメイヨシノを知るきっかけになって良かった。」と認めるところから始めようと思いました。いやみに聞こえないように言い方に気を付けてなきゃですけど。

興味無い人は本当に知らない



シリーズⅢ

東南アジアの木々たち (64)

—桃色と白の南国の花・天人花—



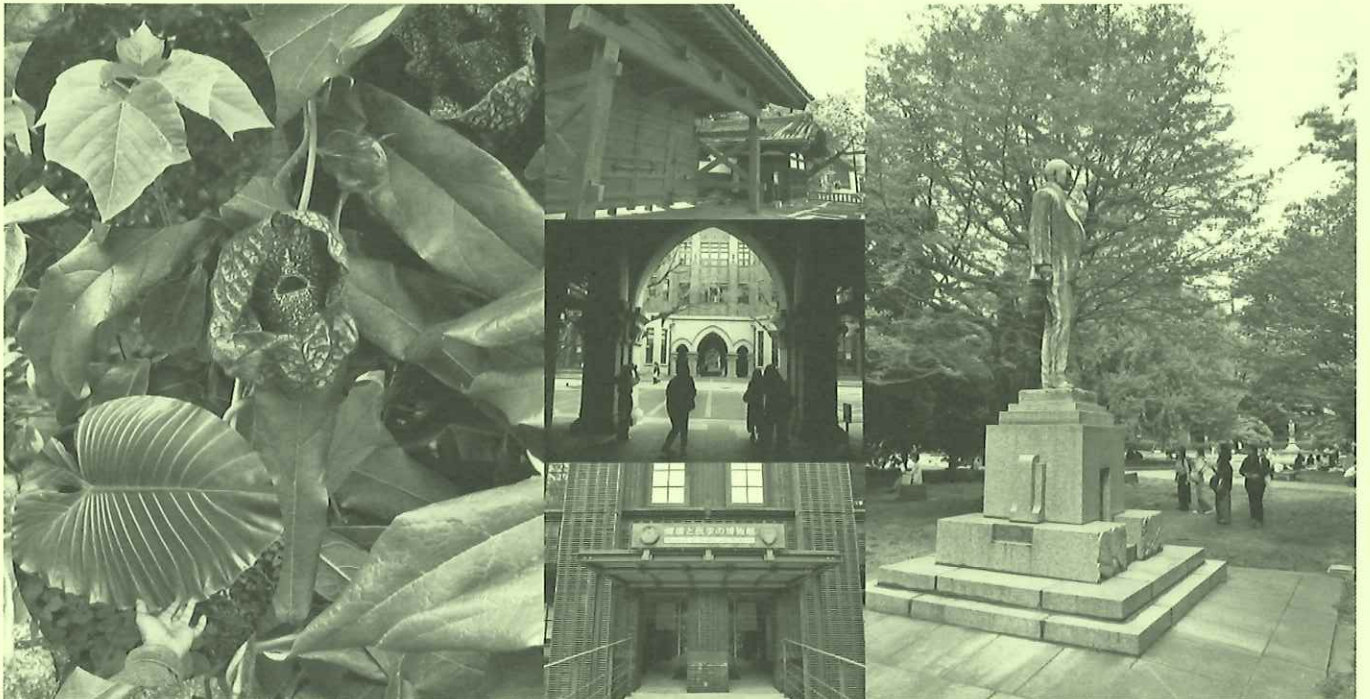
自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史

皆さん、ご無沙汰いたしております。この春はとても冷たい雨の日が多かった記憶が残っておりますが、皆さんは桜の花や、初夏を彩る花木の様子を、少しでも多く観察されたでしょうか？ (^-^)

私の方は、2つほど植物観察会の引率があり、普段、メディカルハーブやアロマセラピーを教えておられる先生方と、東京都内をめぐるおりました。

身近な薬用植物、有毒植物の見分け方とその主な成分、中毒事例などを紹介し、約30種ほど観察して回りました。

参加された方々に人気だったのが、カヤの木と、カラスザンショウの葉を揉んだ時に出る香りでした。甘いお菓子の様な香りや、心が落ち着く香り(鎮静作用)等を含め、楽しみながら体験していかれました。



さて、今回ご紹介する南国のお花は、テンニンカ(天人花)です。インドや東南アジア、中国南部、台湾などに分布し、沖縄では丘陵地帯を中心に野生化しています。その甘い果実を食べると口の中が紫色になりますよ。

ベトナムでは、この果実からワインが作られ、健康飲料として販売されています。ベトナム南西部沖合40kmの場所に浮かぶフーコック島の“特産ワイン”にもなっています。一方で、テンニンカは燃え難い性質(難燃性)があることから“火災”に適応しており、ハワイ諸島やフロリダ州では、侵略的外来種として、元々の自然環境を守る目的で駆除されてもいます。



天人花

Rhodomyrtus tomentosa

Hiroshi Umemoto

子ども樹木博士質問コーナー(79)

一般社団法人日本森林インストラクター会 会長 寺嶋 嘉春



Q 「夏は来ぬ」という歌に、「卯の花」という歌詞があります。「卯の花」について教えてください。(小学6年女)

A 卯(う)の花の、匂う垣根に
時鳥(ほととぎす)、早も来鳴きて
忍音(しのびね)もらす、夏は来ぬ
という歌詞ですね。

「卯の花」は、夏の季語なので、この歌の題名が「夏は来ぬ」になっているのだと思います。「卯月(うづき)」とは、旧暦の4月ですが、新暦では5~6月に当たります。卯月のころに咲く白い花が「卯の花」で、この花の咲く木の名前は、ウツギです。

「卯」は十二支の4番目に当たるので、旧暦4月を卯月としたという説、他に、『大言海』という日本で最初の国語辞典では、「卯月」とは、「植月(うづき)」の義、稲種をうえる月(稲の種をまく時期)」という「植」が転じて「卯」となったとする説もあります。

インターネットで検索してみたら「卯月」とはウツギの花の咲く時期。「卯の花」とは卯月の頃に咲く花。としているものがありました。これでは説明になりませんね。ネットでの検索は便利ですが、信頼できない情報も混ざっていることがあるので、気をつける必要があります。

▶ウツギとヒメウツギ

植物の名前を覚えるとき、よく似た植物があることに注意が必要です。似た植物がある場合は、個別に特徴を覚えるのではなく、似ている植物をまとめてセットで覚えると印象も強く、より多くの植物の特徴や名前を覚えることができます。

例えば、ウツギを覚えるときは、同じような場所に生えるヒメウツギもセットにして、特徴を対比して覚えることです。

一般に、多くの植物は葉の特徴で区別することができます。ウツギとヒメウツギも葉の先端の形と葉の縁の形状(鋸歯)に注目して観察すると、はっきり区別できます。

写真は、ウツギとヒメウツギの葉を並べたものです。それぞれ、いろいろな特徴を比較してみてください。なお、花の咲く時期は、ヒメウツギが先で、ウツギの花は、少し遅れて咲きます。



ウツギの葉の形



ヒメウツギの葉の先はウツギより細長く尖る



ウツギの鋸歯は不明瞭で先が細い糸状



ヒメウツギの鋸歯は小さくやや粗い



ヒメウツギの花

皆さんも、いろいろな木の特徴をよく観察したり、調べたりすることで、興味が深まり、樹木や自然と友だちになることができます。

● ● 事務局だより ● ●

◆令和7年度森林インストラクター「資格試験」・「養成講習Ⅱ」のお知らせ

(一社)全国森林レクリエーション協会では、令和7年度の森林インストラクター資格試験及び養成講習の日程等について、ホームページ (<http://www.shinrinreku>) などで公表しています。

その概要は次のとおりです。詳細につきましては、全国森林レクリエーション協会の森林インストラクター係 (TEL:03-5840-7471) までお問い合わせください。

○資格試験

- ◇受験申込みの受付期間 令和7年6月1日(日)～7月31日(木)
- ◇一次試験 (実施日) 令和7年9月28日(日)
(場 所) 札幌市、仙台市、東京都、名古屋市、大阪市、高知市、福岡市
- ◇二次試験 (実施日) 令和7年11月15日(土)、16日(日)のいずれか
(場 所) 東京都
- ◇合格者の発表 令和7年12月中旬
- ◇受験料 18,000円

○養成講習Ⅱ

講習会場 東京都〈オンライン(ライブ同時配信)による講習受講も可能です。〉

- ◇講習申込みの受付期間 令和7年6月1日(日)～7月31日(木)
- ◇講習期間 令和7年8月9日(土)～16日(土)(8日間)
- ◇講習料 60,000円(30,000円)(()内の金額は学割の講習料)

(注) オンライン講習は、上記日程のうち8月11日は休講とし、8月30日に振り替えて実施します。

◆子ども樹木博士認定活動推進協議会新規会員募集

子ども樹木博士認定活動推進協議会では、新規会員を募集しています。

子ども樹木博士認定活動推進協議会は、「子ども樹木博士」の目的をPRし、情報提供などを通じて、その活動を全国的に推進する組織として、①機関誌「子ども樹木博士ニュース」の発行・配布、②子ども樹木博士教材「樹木ガイド」の提供、③子ども樹木博士認定証(用紙)の提供、④インストラクターの紹介、⑤子ども樹木博士のPRパンフレットの作成・配布、⑥全国の子ども樹木博士の活動状況の取りまとめ及びネットワーク化、⑦子ども樹木博士の実施方法の手引書の作成・配布等の活動に取り組んでいます。

子ども樹木博士認定活動の趣旨に賛同し、子ども樹木博士を実施してみたい、関心がある、またはこれらの活動を支援して下さる団体や個人の皆様の入会をお願いいたします。年会費は、団体会員10,000円、個人会員2,000円となります。

◆実施結果のご報告のお願い

子ども樹木博士認定活動(親子や大人を対象としたものも含まれます。)を実施しましたら、当協議会会員、非会員を問わず、実施結果のご報告をお願いします。

報告用紙は、右記のURLのホームページからWordの用紙をダウンロードできます。報告用紙がない場合は、①実施団体名、②実施年月日、③募集人数、④参加人数、⑤対象者(小学生、親子など)、⑥実施場所を記載したメモを右記のFAX又はメールで子ども樹木博士認定活動推進協議会までお送りください。お手数をおかけしますがよろしくお願いいたします。

子ども樹木博士ニュース

2025年6月1日 No.99

子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽1-7-12 林友ビル6階
一般社団法人全国森林レクリエーション協会内
TEL: 03-5840-7471 FAX: 03-5840-7472
E-mail: kodomohakase@shinrinreku.jp

URL: <http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyou.html>
<http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html>